

戦後宮古の文芸活動(五)

博物館協議委員 仲宗根 將二

一、宮古ゆかりの作家たち

○俳人 篠原 鳳作

1、鳳作をたずねて

現代俳句界の異才・篠原鳳作は一九三二（昭和六）年三月〜一九三四（昭和九）年十月まで、創立まもない県立宮古中学で教鞭をとっていました。二十五歳から二十八歳までの青春期で、季節感にとぼしい南島の生活を通して鳳作は、いよいよ無季俳句への確信を深めていったといわれます。しかし宮古での鳳作についてはまだまだ知られていない面が多く、「篠原鳳作句文集」（一九七一年・形象社）にあるこの時期の年譜も必らずしも充分とはいえません。さいわい宮古中学時代の教え子や同窓生によってさきごろ、カママ嶺公園に句碑「しんしんと肺碧きまで海の旅」が建立され、これを契機に鳳作を掘りおこそうとするひそかな胎動がは

じまっています。鳳作の足跡をたずねることはまた、この島の文芸運動にあらたな気運をそえるものであり、もつともつとだいにされなければならぬ——このように強調するこえがきかれるゆえんでもあります。〔宮古教育時報〕一九七二・二二・九

2、しんしんと肺碧きまで海の旅

かつて宮古中学で教鞭をとった俳人・篠原鳳作の「句碑」除幕式が十一月二十日あさ十時過ぎから平良市カママ嶺公園で催されました。医師の平良賀計氏ら宮古中学の同窓生を中心に組織された「篠原鳳作句碑建立委員会」によって建立、故鳳作夫人前田秀子、遺児篠原正義氏をむかえて催されたものです。

除幕式には日本現代俳句協会長・三谷昭氏ら著名な俳人はじめ県内外から宮古中学の同窓生など多数の関係者が参列、故人の業績にふさわしい雰囲気のなかでおこなわれました。

平良賀計、平良重信（平良市長）、宮国泰良（宮古支庁長）氏らのあいさつにつづいて篠原正義氏が次のようにあいさつしました。「鳳作が宮古島でお世話になったのは昭和六年三月から九年十

月までですが、その後十一年九月に死んでおります。あれから四十年近い歳月が過ぎていますが、宮中卒業生を中心に毎年鳳作追悼の句会を催し、また今回沖縄の祖国復帰の年に句碑の除幕式ができまして鳳作はしあわせだと思えます。

宮古島へ来て、浜辺や街角を歩いていると、まだ会ったことのない浴衣がけの父にばったり会うような気さえします。現代俳句協会長の三谷昭先生ら、また十七年前鹿児島島の長崎鼻にこの宮古島に向けて句碑をたてられた前原先生ら多くの方々、沖縄からは宮古高校の校長先生はじめ多くの方が参列していただき私たち母子は感謝の念でいっぱいです。」

なお除幕式につづいて記念植樹、郡内観光、つづいて夕方五時半、市民会館和室で句会、七時からは中ホールで祝賀パーティを催しました。秀子夫人、正義氏ら県外からの参加者は二十一日あさ空路一便で帰郷しました。

『宮古教育時報』一九七二・一一・二二

3、『篠原鳳作の周辺』

篠原鳳作（本名Ⅱ国堅）は、一九〇六（明治三十九）年一月、鹿児島市に生れた。第七高等学校（鹿児島）をへて昭和四年、東京帝大法学部を卒業したが、世界的な大不況のなか、帝国大学をでて就職は容易ではなかったようだ。二年後の昭和六年三月、創立間もない県立宮古中学校の英語・公民科の教諭として赴任してきた。東大在学中、すでに俳誌『ホトトギス』に入選、卒業後は鹿児島に帰って本格的に俳句にうちこんだといわれる。当時五学年各一学級の宮古中学には三年半教鞭をとったが、その間一学期七期生までが教えをうけ、なかには直接俳句の手ほどきをうけた生徒もいる。このころは雲彦と号し、とくに無季俳句に精進し、俳壇からも囑望されていたが、当時の宮古はそれほどの人物とは気づかなかつたようだ。

四季の変化にとほしい宮古で、句作に苦労した鳳作は、反面無季句に対していよいよ自信を深めたであろうとみられている。昭和九年十月、母校の鹿児島二中に転勤して号も鳳作と改め、これからというとき、昭和十一年九月病没した。三十歳である。戦後の昭和三十年、薩摩半島の長崎鼻に宮古島をのぞんで句碑が建ち、

さらに同四十七年には鹿児島に向けてカママ嶺公園にも「しんしんと肺碧きまで海の旅」の句碑が建てられた。いまもうたいつがれている「宮中（高）行進曲」は作詞作曲ともに鳳作その人の手になるものである。

本書は宮中在勤三年半の間、もっとも長く教えをうけた三期生を中心に編集発行された亡き師への五十年をへてもなおあつき思ひ出集である。A五判、一二七頁、非売品。

『宮古郷土史研究会会報』三六号、一九八一・六・一三

4、鳳作と若き宮古の群像

満天の星に旅ゆくマストあり

しんしんと肺碧きまで海の旅

幾日はも青うなばらの円心に

この三句は一九三一（昭和六）年三月〜三四年十月まで、創立間もない沖縄県立宮古中学校（現宮古高校）で教鞭をとった鹿児

島県出身の俳人・篠原鳳作の作品である。季節感の乏しい宮古での生活が逆に「無季句の旗手」と言わしめるほどに精進させたのであろう。宮古中学を去って母校の鹿児島第二中に赴任、わずか二年後の一九三六年九月十七日に急逝している。三十歳である。

それからほぼ二十年後の一九五五年七月二十四日、生前の鹿児島の句友らによって、薩摩半島南端の長崎鼻^{はな}に宮古に向けて前掲三句の碑が建立された。この作品は宮古を去ったその月の句誌『天の川』と『傘火』に、「海の旅」と題して発表した作品中の三点である。句碑建立委員長をつとめた中尾良也は、「しんしんと…」の句について「海洋作品としては古今に絶するものである」と激賞している（三宅信昭『鹿児島の文学碑』一九八二）。

それから十七年へた一九七二年十一月二十日、今度は宮古中学の教え子を中心とする句碑建立委員会によって、長崎鼻の句碑に向けて、平良市下里・カママ嶺公園の丘陵上に二つめの句碑が建立された。奇しくも二つの句碑を結ぶ線上には鳳作のかつての下宿先、日の丸旅館（現共和ホテル）が位置しているという（平良賀計「鳳作と宮古島」一九七二）。除幕式には鳳作夫人の前田秀子

さん、長男の篠原正義氏はじめ、三谷昭現代俳句協会長や鹿児島
の俳人、藤後左右、国武十六夜、辺見京子、高橋豊子、神宮司茶
人ら、那覇からは平良賀計、国仲穂水、伊志嶺茂氏ら。地元宮古
では、平良市、同教育委員会、南沖繩新聞社、宮古新報社、宮古
毎日新聞社、宮古俳句会、宮古文化放送社、宮古観光協会の八団
体が共催、鳳作の教え子はじめ宮古高校関係者多数が列席した。
句碑建立に尽力した平良賀計医師、平良重信平良市長、宮国泰良
宮古支庁長のあいさつにつづいて、篠原正義氏が要旨次のように
あいさつしている。

「鳳作が宮古島でお世話になったのは昭和六年三月から九年十
月までですが、その後十一年九月に死んでおります。あれから四
十年近い歳月が過ぎていますが、宮中卒業生を中心に毎年鳳作追
悼の句会を催し、また今回沖繩の祖国復帰の年に句碑の除幕式が
できまして鳳作はしあわせだと思います。」

宮古島へ来て、浜辺や街角を歩いていると、まだ会ったこと
ない浴衣がけの父にばったりあうような気さえます。」

『宮古教育時報』一九七二・一一・二二。

教え子のひとりである名嘉真春景宮古高校長は、ガジュマルの
葉っぱで鳳作の作詞作曲で知られる「宮中（高）行進曲」を吹奏、
亡き師への追慕の情を新たにしていた。

鳳作の本名は国壁^{としかた}。一九〇六（明治三十九）年一月七日、鹿児
島市で出生。県立鹿児島二中、第七高等学校造士館をへて、一九
二九年三月、東京帝国大学法学部政治科を卒業している。世界的
大不況のなか、東大出でも就職難の時代。たまたま那覇の歯科医
師へ嫁いでいた姉を頼つて来沖したとき、創立間もない宮古中学
への就職が決まった。英語と公民を担当、時には美術も教えてい
る。一―七期までが直接の教え子、もつとも長い三年半教わった
のは三期と四期である。三期の平良尚介、大山春明、砂川寛亮、
伊志嶺茂、四期の糸洲朝薫らは、一九八一年四月十五日『篠原鳳
作の周辺』を刊行、多くの教え子やかつての同僚らが鳳作への熱
い思いをつづっている。

鳳作の影響を受けたのは教え子ばかりではない。句碑建立に尽
力した平良賀計医師は鳳作の去った翌年四月の入学である。西里
通りに面していた自宅前を朝夕、通勤時に往来する鳳作の姿は子

ども心にも印象に残り、のちに句作を始めていつそう深く鳳作を知るようになった、と語っている。

鳳作在職時の宮中職員は十三人、このうち県出身八人(宮古二)、県外出身五人である(『平良町誌』一九三四)。出身地を異にする多様な教師陣の薫陶を受けた、宮古中学草創期の若ものたちこそ、太平洋戦争で焦土と化した宮古の戦後復興の立役者であった。宮古市政府から「琉球政府」へ、県下各界で時として「宮中閣」とよばれ、戦後宮古を牽引したのは未だ記憶に新しいところである。「篠原鳳作の世界」展は、十二月三日まで市立図書館で開催中である。未だの方はこの機会にぜひ見ていただきたい。

『宮古毎日新聞』二〇〇四・一一・二二

5、「無季句の旗手 鳳作」展

「しんしんと肺碧きまで海の旅」などの作品で「無季句の旗手」と囑望されつつも夭逝した鹿児島県出身「俳人 篠原鳳作の世界」展は、十一月二十四日～十二月三日、平良市立図書館で開催された。參觀者四九六人。一九二九(昭和四)年、東京帝国大学法

学部を卒業した鳳作(本名・国堅)は、創立間もない県立宮古中学に三一年三月赴任、三四年十月迄の三年半、公民と英語を教授、時には美術を担当するなど、一期七期生までを教えています。大学時代から俳句を始め、卒業後に本格化したのが、四季の変化の乏しい宮古に来て、無季句への志向を深めたと伝えられています。いわば宮古は鳳作の無季句への開眼の地とも言えるようです。

市立図書館では、「鳳作の会」(上地照子代表)の全面的な協力を得て開催したのですが、鳳作の会の主力メンバーである友利昭子、池間キヨ子、池田俊男氏らは、二〇〇二年十二月、平良市熱帯植物園に「飯島晴子句碑」建立と併行して数年来「鳳作展」開催に必要な資料収集に尽力していったものです。展示資料のほとんどは鳳作の長男、篠原正義、甥の篠原寿宏、鳳作の宮古中学時代の同僚・故慶徳健の長男、一彦、平良賀計、砂川寛亮氏らの協力で集められたようです。

展示は、「篠原鳳作年譜」、「写真でふりかえる鳳作の姿・俳句二十五選」、「旧制宮古中学校時代の鳳作」、「父・篠原鳳作について」、「カママ嶺公園に鳳作句碑の建つまで」、「鳳作関連書籍・新聞資

料等」、「宮古の俳句の今」、「鳳作展記念吟行会」、「作品展示・宮古の句碑マップ」、以上九つの領域で公開されました。

開幕初日には、伊志嶺亮平市長、久貝勝盛同教育長、上地照子鳳作の会代表によるテープカットがおこなわれ、三氏がそれぞれあいさつしました。俳人でもある伊志嶺市長は「鳳作が亡くなって七十年になるが、鳳作の世界展が開催されることをうれしく思う。昭和六年から三年半の宮古での生活で鳳作の新しい俳句が生まれた。鳳作を愛する宮古の人たちが熱意をもって聞く「俳人篠原鳳作の世界」展を機会に、俳句を愛する人たち、とくに児童生徒の俳句人口が増えることを期待している」と祝辞を述べていました。

なお鳳作の会では、初めての鳳作展を記念して吟行会を催しており、開会式で表彰もおこなわれました。選者は、真栄城いさを氏。入賞者は次のとおり。鳳作賞Ⅱ池間キヨ子「神の留守鳳作の海黄濁し」、碧海賞Ⅱ安田久太郎「色鳥の碧の一字さ落しけり」、海の旅賞Ⅱ友利昭子「鳳作の丘にて風を聴くばかり」、竜舌蘭賞Ⅱ砂川孝子「鳳作の句碑へ行く道花つるぼ」、浜木綿賞Ⅱ渡久山和子

「霜降の句碑の目覚める音のあり」、さしば賞Ⅱ辻泰子「公園のほゞ中央や新松子」。

(「宮古郷土史研究会会報」一四六号、二〇〇五・一・一四)

○詩人 克山滋

1、幻の詩集『白い手袋』の周辺

戦後宮古の詩壇に彗星の如く現われて逝った克山滋の『詩集・白い手袋』は、宮古のみならず那覇や石垣の文学青年の間にも少なからぬ反響をよんだと伝えられている。今やその一片をそらんじているそのかみの文学青年もいるほどに、鮮烈な印象をのこしているようである。

しかし惜しいことに三十余年の歳月は『詩集・白い手袋』の所在さえわからなくなしてしまった。今やかつての友人も所蔵していないようだ。十余年来、戦後の文芸活動に関心をよせ、克山滋についても、可能な限り調査をすすめてきたが、雑誌等に発表したいくつかの作品をみつけるに止どまり、かんじんの詩集は確認できなかつた。「幻の詩集」と噂されるゆえんでもあろうか。

もはや現存しないものと半ばあきらめ、近年は照会さえ中断していたが、この春偶然にもその所在を知ったのみか、直接手にするしあわせにめぐまれたのである。

詩集は、自序のほかに大浜信光、仲村渠、本村武史ら三氏の序文が巻頭をかざっている。しかも見開きには、克山自身の筆跡と思われる「贈 大浜信光先生 克山滋」と、個性ゆたかなペン字がおどっている。

大浜氏はその序文で、傾向の違う克山の作品について、「私とは縁遠いものであるが、琉球の乞食がアラビアの美しいお姫さまを見るような思ひがする」と記している。すでに名をなしていた大浜氏が、他郷の若き詩人・克山滋に親愛の情を示していたことを知るとともに、克山もまた大浜氏に並々ならぬ好意をよせていたことを知ったのである。

『詩集・白い手袋』は装幀大宜見朝晴、印刷富永裕夫氏で、一九四八（昭和二十三）年十月十日、著者克山滋を発行者として発刊されている。菊判のわずか三十五ページ、二十五円の小詩集であるが、紙も少なく、印刷機材も払底していたころにしては、小

ぎれいな出来ばえである。表題に使われた「白い手袋」を手始めに、次の二十一編が収録されている。

- 1 白い手袋
- 2 メロン色の朝
- 3 貝殻の夢
- 4 カンカン帽
- 5 透明なダイビング
- 6 午後のポール
- 7 真赤な風車
- 8 トメトの日
- 9 濡れるディアス
- 10 失はれた時
- 11 春への序曲
- 12 五月の貝殻
- 13 MODERN OKINAWA
- 14 星条旗

- 15 ポエジイの花束
- 16 スケッチ
- 17 晩夏
- 18 春の声
- 19 虚飾の青春
- 20 夏のアルバム
- 21 五月の夜

戦後宮古の文芸運動は本村武史、克山滋、平良好児ら二十一三十代の若い詩人らによってはじめられた。敗戦の翌一九四六年十月一日には早くも『文芸旬刊』を創刊している。B4判、ガリ版刷り裏表二ページにしかすぎなかったが、毎号十余名が詩、短歌、俳句、エッセイ等を細い字でぎっしりつめこみ、文字に飢えた人びとの貴重なオアシスの役割をはたしていた。『文芸旬刊』のほか『文化創造』（平良好児主宰）、『文化』（宮古文化連盟）、『郷土研究』（稲村賢敷主宰）、『文芸』（本村武史主宰）等があいついで創刊され、さらに詩集や句集、小品集まで刊行されている。わ

けても克山滋の詩活動はめざましく、そのシュールリアリズムの手法は、読者をうならせた。『詩集・白い手袋』は、唯一の作品集である。

克山滋の本名は大見謝恒全である。その実家は那覇市松下町だが、大正時代から平良市西里で、今も大きな呉服問屋をいとなんでいる。大正九年十月十五日生まれで、早稲田大学専門部政経科を中退して日本大学芸術科に学び、かたわら演技座で演技の研究をし、築地小劇場で舞台を踏みながら、同人誌「カルト・ブランシュ」に拠（よ）って詩をつくるという、きわめて多彩な活動をしてきたようである。さきの大戦中は南方におくられ、数年間を戦場で過ごしたのち、敗戦で復員、再び詩を書きはじめた。

発表の場はおもに『文芸旬刊』と『文化』等であった。『文芸旬刊』創刊号に発表した「トメトの日」は、次にみるように、きわめて平易で明るく、一幅の絵画をみるような親しみをおぼえさせる。

トメトの日

海の見える

バルコンで

マカロニイのパイプを

磨いて みると

朝のスコオルガ

薊の花束とともにやって来た。

午后

貝ボタンの少女が

シャボテンのやうに笑ふ

自序によると、この詩は一九三九—四〇（昭和十四—十五年）年

ごろというから、十八—九歳ごろの作品である。

それからおよそ十年を経過した一九四八年八月、『文化』五号に

は次の詩を寄せている。

夏のアルバム

白い正午

だれもゐないテラス

シャボテンがポキンと折れた

水に濡れた薔薇

貝殻がすばやくゆがむ

口笛は

緑いろにころがり

レインボウを飲み込んだ

ニグロは

眩しいブイに跨り

白い計算器のように爆笑する。

あ

八月のサンチマン

ここには、生のままの生活や思想は出てこない。むしろ完全に捨象されているようだ。いわば生のままの生活や思想を詩にうたいこむことを排斥しているようである。

こうした絵画的詩風から彼は「色彩詩人」とも呼ばれ、詩友は

もとより宮古郡内外の多くの人びとから愛されたようだが、『詩集・白い手袋』を出して、わずか数カ月後の一九四九(昭和二十四)年二月二十一日、交通事故で不慮の死をとげた。二十八歳と四カ月のみじかい生涯である。

それから三十年、「幻の詩集」といわれた彼の唯一の刊行本『詩集・白い手袋』が、彼の敬愛した詩人・大浜信光氏によって所在が明らかにされ、宮古におくられたのは奇しき因縁とでもいえようか。『琉球新報』一九七九・五・二六)

2、詩人克山滋と『詩集 白い手袋』

第二次世界大戦後の廃墟に立つて、人びとは衣食住にも事欠き、働く場とてなく、なす術も知らず途方にくれていた。まわりのすべてが同じような状況にあつたために、その深刻さがどのていどものか、実感していなかつたろう。実際には個々の家庭はもとより、日本本土はおろか、沖縄本島からも切り離された孤立無援の宮古そのものが、呆然自失の状況を呈していたともいえる。

世の中が一定の落ちつきをみせ、衣食住も一応人間らしい様相

をみせるようになって、人びとは、あのときは……、というふうにふり返り、背すじを寒くしているのが実際の姿ではなかるうか。このように分別くさいことを思い、あるいは多少とも考えたりしつつもなお、いつも理屈ぬきに畏敬の念を向けざるを得ない——と思う一群の人びとがいる。外見上はまさに動物の領域にあえいでいたあのととき、腹の足しどころか、一文の金にもならない新聞や雑誌の発行にたずさわっていた人びとに対してである。

これつぼちの給与では生活できないと、教職を去つてブローカーに転じる人もいたというあのころ、これら一群の人びとは、創作活動をつづけるのみか、焼跡に紙をみつけ、インクをさがしまわつて、小さな紙きれ一枚の新聞をつくり、あるいは裏表一枚きりの文芸誌を出していた。衣食住にも事欠いていたはずの人びとが、競うようにして一枚きりの新聞や雑誌を求めて、印刷所まで出向いてきたという。如何に文字に飢えていたかを示すエピソードだが、まさに人はパンのみに生きるにあらずのよき見本である。

文芸活動では、石原昌秀、平良好児、藤村彪、平本魯秋、本村武史、克山滋、国仲穂水ら十数人の名がある。これらの人びとの

なかには、すでに故人になった人もおり、いまなお精進をかさね若ものをしのぐほどに創造活動をつづけている人もいる。

ここに紹介するのは天寿をまつとせせず、交通事故という思いがけない災難で天逝した詩人・克山滋についてである。

克山は一九二〇（大正九）年十月十五日に生れた。父恒盛は元々那覇市松下町の出身で、大正のころ宮古に渡り呉服商を営んだ。

宮古の老舗である。

一九四九（昭和二十四）年四月発行の『文化』九号は、克山について、早稲田大学専門部政経科を中退して日本大学芸術科に入り、かたわら同人誌カルト・プランシユに詩を発表、また演技座で演技の研究をなし築地小劇場で活躍中、応召…、戦後復員して宮古で文化運動に挺身した、と記している。

同号は、実は克山が同年二月二十一日午前一時十五分、自動車事故で急逝したのを悼んでの特集号である。略歴のほか、遺稿「M君への手紙」とともに本村武史、奥平朝一ら友人の追悼の一文が掲載されている。

『文化』は、当時の宮古民政府の提唱で設立された宮古文化連

盟の機関誌であり、克山がこのころの宮古の文化運動で少なからぬ貢献をしていたことを示していよう。生前にのこした作品集は、

一九四八年十月十日発行の『詩集・白い手袋』の一冊である。この詩集は菊判、三十数ページの小冊子で、自序のほか大浜信光、

仲村渠、本村武史らが序文をよせ、詩二十一編を収録している。

このうちはじめの十編近くは東京時代の作品であると、自序にこ
とわっている。二十歳前後ということになる。他は数年間の南
方での軍隊生活ののち、帰郷後の作品のようである。

克山の詩風は一般にシユールリアリズムとみなされていたよう
だが、作品は絵画的要素がきわめて濃く、友人間では「色彩詩人」
とよばれていたようだ。

晩夏

白いドアに

凭れて

貝殻のやうに

しづかに硬くあつた

リボンを

冷たい立像に捲きつけ

くづれた身に

つよく

薔薇の香が零れてゐた

確かに多くの友人がみとめていたように、宮古はなれした詩風である。また、これらの作品から生のままの生活や思想をうかがうことはむづかしい。むしろそのようなもろもろの世事は、作品以前のものとして一切排斥しているとさえいえる。

『詩集・白い手袋』に収録された二十一編の作品のほか、いまのところ克山の詩作品は見当らない。発行後わずか四か月で死去するという悲運も関係しているよう。一九四六年十二月創刊の『文芸旬刊』や『文化』掲載の作品は、すべて詩集に再録されている。

ほかには「父親となるの記」「茶房サロン」のほか、前述の遺稿「M君への手紙」と「たばこのハナシ」などの小品四編がみうけられるていどである。

詩人・克山滋が二十八歳の若さで逝つてすでに三十年の才月が流れている。この間、宮古はまだ克山ほどの詩人をうんでいないのではないだろうか。彼ののこした作品を一つにまとめて刊行する動きはないものだろうか、このごろ思うや切である。

ともあれ、久しく幻の詩集として探索の声のきかれていた『詩集・白い手袋』は、著者が生前親交のあつた八重山の詩人・大浜信光氏に贈つた一冊が、いま伊波寛氏の仲介で、平良市史編さん委員会へおくられてきている。戦後宮古の文芸運動を記録するにふさわしい貴重な資料として、充分にいかされることになる。ここに改めて詩人克山滋に心から哀悼の意をささげるとともに、愛蔵の書を快くご提供くださった大浜信光氏並びに斡旋の労をとられた伊波寛氏に感謝申しあげる次第である。

〔郷土文学〕二四号・一九七九・八・一〇

*『詩集 白い手袋』は、一九八三・二・二一、遺児大見謝恒一郎氏によつて『白い手袋―克山滋遺稿集』の題で若夏社（那覇）から刊行されている。

二、平良好児賞

平良好児賞

- 第1回（一九九七年） 友利 敏子 句集『花冷え』
砂川 智子 エッセイ『楽園の花嫁』
- 第2回（一九九八年） 平野 長伴 詩集『水平線』
垣花 鷹志 エッセイ『かたぶい』
- 第3回（一九九九年） 佐渡山 政子 小説『ゆずり葉』
大城 健 句集『地球の耳』
- 第4回（二〇〇〇年） 本村 隆俊 句文集『梯梧』
- 第5回（二〇〇一年） 渡久山 寛三 歴史小説『島燃ゆ』
奥浜 幸子『暮らしと祈り』
- 第6回（二〇〇二年） もりおみずき 戯曲『希望』
砂川 昇『ガラスの器』
- 第7回（二〇〇三年） 宮国 泰晟 小説『ノーバディ・ブツダ』
さいが族『読めば宮古！』
- 第8回（二〇〇四年） 池間キヨ子 句集『花甘蔗』
- 第9回（二〇〇五年） 伊良波盛男『鬼虎伝説―与那国を守った男』
伊良部喜代子 歌集『海神祭』
池間哲郎『夢は大人になるまで生きること！』
- 第10回（二〇〇六年） 平良 雅景 句集『はぐれ鷹』
砂川 光子 歌集『時間の川』
- 第11回（二〇〇七年） 豊島 貞夫『記憶の中の風景』
かわかみまさと 詩集『宇宙語んん』
- 第12回（二〇〇八年） 藤村 きみ 歌集『いのちの雫』
市原千佳子 エッセイ『詩と酒に交われば』
- 第13回（二〇〇九年） 該当者なし
- 第14回（二〇一〇年） 森田たもつ 小説『蓬莱の彼方』
- 第15回（二〇一一年） 新城 森彦 歌集『万の花房』
下地ヒロユキ 詩集『それについて』
- 第16回（二〇一二年） 砂川 健次 戯曲『この空を飛べたら』
- 第17回（二〇一三年） 伊志嶺節子 歌集『ルルドの光』
上地 慶彦『マツガニ川柳』

〈第2回〉平野長伴 詩・美術

平野長伴さんは詩人としてより画家としての方が著名です。四〇年余にわたる公務員生活のかたわら、「二季会」設立に参画、开展、創斗展、春陽展、平和美術展・・・と、数々の美術展にかかわって、同人あるいは会友となり、多くの賞も得ています。

一九八一（昭和五六）年三月、詩集『水平線』を出版、知られざる一面をのぞかせました。生涯「種まく人」を自負して逝った好児さんの『郷土文学』に登場したのは同年八月、三二号からです。以来、最終の九〇号まで欠かさず寄稿しています。途中からエッセイも手がけ、詩一四〇編、エッセイは二七編にのぼっています。沖縄エッセイストクラブや、那覇市文化協会文芸誌『あやもどろ』等での活躍も広く知られています。

さらに、一九九五（平成七）年、沖縄本島在住宮古出身者で「宮古の自然と文化を考える会」を結成して会長をつとめ、年三回公開の研究会を催すなど、その営為は宮古への励ましともなっています。この夏、第二詩集が目の目をみます。年令をこえて期待される所以です。（一九九八・五・二〇）

*第二詩集『母が手』^{アシナ}_{タイ} 一九九八・八・一〇刊

〈第3回〉佐渡山政子 小説・民話

政子さんの作品はその豊かな表情そのものを反映するかのよう
に、明るく親しみやすいものがあります。美術専門学校をへて、
社会人として出発した当初から、古老をたずねて民話・伝承の聞
き取り調査を始めたことも、少なからず影響していることでし
う。

新聞記者としての多忙な明け暮れのなか、短歌、俳句、エッセ
イ、書評：と、文芸各方面にわたって多くの読者に紙面を解放する
傍ら、自身もつねに底辺からの論説やエッセイをものにし、創作
に励んでいます。

「民話の会」や「神と森を考える会」等で夫君の安公氏と事務
局を預かり、世に送った民話集も既に十数点をかぞえます。

こうしたじみな活動の上に生まれた作品は、市民総合文化祭で
市長賞、「農村婦人の日・私の意見」で優秀賞、さらに琉球新報社
の児童文学「創作昔ばなし」で佳作、同じく琉球新報社の「短編

小説賞」で優秀賞などの高い評価を得ており、その活動の広さは他の追隨を許さぬものがあります。(一九九九・五・二〇)

〈第4回〉本村隆俊 俳句

本日は第四回平良好児賞授賞祝賀会にこのように多くの方がご出席くださいまして有り難うございます。

さきの世界大戦直後、私どもの先輩方は衣食住にも事欠く焦土のなかで、文芸協会を設立し、定期的に短歌会や俳句会、あるいは文芸座談会等を開いて、小さいながらも会報「旬刊文芸」も発行しておりました。そのとき文芸協会に参加したのは当初は本村武史、平本魯秋、平良好児、克山滋さんから十五人です。何しろ五十余年前の出来ごとです。そのほとんどの方が既にお亡くなりになつてしまいました。今も健在の方がお二人おられます。その中のお一人が本日の主役であります本村隆俊さんです。

本村さんは当時二十代半ばにさしかかったばかりの若ものです。以来五十余年、コツコツと句作に励んでこられました。今夜は本村さんを囲んで共にたのしい一刻を過ひとときごしましょう。

それではただ今から第四回平良好児賞の授賞式ならびに祝賀会を始めさせて頂きます。(二〇〇〇・五・二〇)

俳人の本村隆俊さん

第四回「平良好児賞」に俳人の本村隆俊さんが選ばれ、五月二十日、平良市西里・ホテル共和で授賞式ならびに祝賀会が催されました。平良好児賞は、生涯ジャーナリストとして、あるいは宮古の文芸活動の「種まく人」として尽力した故平良好児さんの功績をたたえ、その遺志を継ぐために設けられたもので、毎年故人の誕生日に当たる五月二十日に催しているものです。伊志嶺亮顕彰会長から授与されました。

本村さんは一九四一(昭和十六)年三月、県立宮古中学校を卒業後、宮古島測候所(当時)に入り、以後県内各地の測候所、氣象台に勤務、一九八三年与那国島測候所長で退官しています。その間、一九四六年十一月、故兄本村武史や平良好児らとともに宮古文芸協会設立に参加、俳句はじめ文芸活動を始めています。特に退官後は本格的に句作をはじめ翌一九八四年には俳句結社「鷹」

に入会、また好児さんが中心になって設立した麻姑山俳句会の主要メンバーとして活躍しています。一九九九年九月には俳句やエッセイをまとめた句文集『梯梧』を上梓しています。これらの活動が今回授賞の対象となったのです。

授賞式では伊志嶺顕彰会長が「本村さんは敗戦後の食糧難のころから数十年、コツコツと文芸活動に携わってきた一人で、すごいと思う。好児賞に最もふさわしい人物である。私も俳句をつくる一人として大変嬉しい」と、本村さんの功績をたたえています。

本村さんは「夢想だにできなかった授賞に驚いている。これを励みにこれからも青い海に囲まれた美しい宮古で、私なりの俳句を作りつづけたい」と、お礼を述べていました。池間キヨ子さんの作品朗読・吟咏や立津精一平良市文化協会会長はじめ、池村恒仁（同期生）、徳嶺恵美子（俳句）、与座勇吉（短歌）、下地明増、池村正義、照屋よし子さんと大勢の出席者から祝辞がおくられました。

なお故平良好児さんは一九七五年四月、宮古郷土史研究会の設立にも参加、翌七六年四月、初の役員選出にさいしては運営委員に選ばれ、生涯そのポストにあつて、小学校の同期生でもある故

宮国定徳初代会長をたすけて研究会の発展に尽力されています。

『宮古郷土史研究会会報』一一九号、二〇〇〇・七・一二

（第五回）渡久山寛三・奥浜幸子

恒例となった「平良好児賞」の第五回受賞者は、渡久山寛三氏と奥浜幸子さんの二人に決まりました。平良好児顕彰会（伊志嶺亮会長）によつて五月二十日よる、レストランのむらで授賞式ならびに祝賀会が催されます。

故平良好児は「生涯を通じて短歌を中心に、文芸・ジャーナリスト、郷土史など幅広い分野にわたつて精力的な活動をくりひろげた宮古文芸の“種まく人”（平良好児賞の創設について）でした。一九九六年（平成八年）四月一日、八十四歳の生涯をとじた年の暮れ、有志によつて追悼会が開かれました。席上、好児さんを顕彰するとともにその遺志を受けつぐ趣旨のもとに、平良好児賞実行委員会（のち平良好児顕彰会に改称）が発足しました。こうして伊志嶺亮、松原清吉、砂川玄徳、友利敏子ら選考委員が選任され、翌一九九七年五月二十日好児誕生日に第一回授賞式が催さ

れたものです。一回め友利敏子、砂川智子、二回め平野長伴、垣花鷹志、三回め佐渡山政子、大城健、四回め本村隆俊らが授賞しています。

今回第五回の荣誉をうける渡久山氏は一九一四（大正三）年一月十五日平良・東仲宗根生まれ、沖繩師範は好児さんと同期入学です。団体役員、会社重役等の傍ら著述活動に入り、『沖繩経済の足あと』『極限の沖繩戦』『遙かなる祖国』『島燃ゆる宮古島人頭税廃止運動』『琉球処分』探訪人・大湾朝功』など多数の著書、エッセイ等を発表しています。奥浜さんは一九四九（昭和二十四）年一月八日、平良・西里生まれ。琉球弧の島々の祭祀や人びとと一りわけ女性の暮らしを調査し、著書『暮らしと祈り―琉球弧・宮古諸島の祭祀世界』はじめ、「春をひさいだあと」「祭祀と環境」など、多くのルポ、エッセイ等を発表しています。宮古郷土史研究会の運営委員です。

『宮古郷土史研究会会報』一二四号、二〇〇一・五・一二

渡久山寛三 小説・エッセイ

渡久山寛三氏は好児さんと沖繩師範学校の同期生であり、生涯を通じての親友でした。好児さんが卒業を目前にして、治安維持法違反容疑で放校されたのちも親交はつづけられ、好児さんの死の直前まで互いに著書を発行の都度贈呈しあっていました。

幼少より文筆家を志していた渡久山氏は、学業を卒えて公務員、経済人として活動しつつもその思いは一貫して変わらぬ堅持していたようです。業務の延長線上にある「沖繩企業診断実例集」（一九六七年）、「沖繩経済の足あと」（一九六九年）等を発表するとともに、一九七三（昭和四八）年には「極限の沖繩戦」を発表、本格的かつ精力的に小説、エッセイ等を発表していきます。

宮古を題材にした代表作の一つである「島燃ゆる」は、沖繩県の真の近代化を促した宮古農民の人頭税廃止運動を主題にしています。詳細にわたる文献の抄録、古老の聞き取り等によって、明治期宮古の人頭税社会と廃止運動の道筋を鮮明に描写しています。のちに宮古広域圏事務組合によって劇画にされ、小・中学生から大人まで愛読されていることは、広く知られているところです。

また日本ペンクラブや日本エッセイストクラブ会員としての活

動をはじめ、一九八二年九月には沖縄エッセイストクラブを設立して会長をつとめ、翌年十二月から現在に至るまで十八年、毎年合同作品集を発刊するなど、多くの書き手を育てていること等が高く評価されています。(二〇〇一・五・二〇)

〈第6回〉砂川昇 『ガラスの器』

ハンセン病はかつて「らい病」、あるいは「天刑病」とよばれ、世の嫌悪にさらされた。一度び烙印を押されると法の名のもとに強制隔離され、時に監禁さえされたのである。こうして生涯本人はもとより家族や関わりありとみなされるすべてが社会的偏見と差別にさらされた。

砂川昇さんは地元新聞の敏腕記者から編集長として活躍していた三四歳のとき兆候があらわれ、絶望のどん底に突き落とされた。苦悩の数日後、今まさに自死せんと麻縄に手をかけたとき、保育所に通う四歳の息子の「ただいまーっ」との声に我に返る。妻や身内が差別と偏見にさらされぬうちにと、誰にも告げず出郷、療養所に入所した。二十二年前のことである。

一九九六(平成八)年四月、ハンセン病患者ははじめ心ある人びとの永年にわたる血のにじむような努力―運動で、九〇年にわたって人権を侵害しつづけた「らい予防法」は廃止された。人権回復のための国家賠償請求裁判が起こされ、二〇〇一年五月、熊本地裁は国のこれまでのハンセン病対策は「憲法違反」との判決を下した。

『ガラスの器』は、ハンセン病の宣告で「空白の人生」を余儀なくされ、「差別と迫害、貧困の中で生きてきた妻や子どもたち…」との絆を修復していく二十二年の記録であるとともに、いまなお不本意な「顔のない人生」を送らされている元患者・退所者に代わって、世の偏見・差別の実態を身を挺して明らかにし、「顔のある人生」をめざす報告である。実名を名乗るのは必然の帰結であり、その勇気と家族愛に心から敬服するものである。

(二〇〇五・五・二〇)

〈第7回〉宮国靖晟 小説

主人公達は、インドの瞑想世界に魅せられて三度もインドに渡

った。定住しない風来坊の遼は、突然ヤマサキという男に出くわすが、男は遼が以前別れた女の夫らしい。そこから遼は謎の世界に巻き込まれていくが、ヤマサキの背後にある国家の防衛機密にかかわる巨大な組織に絡みつく。さらに娘の問題、生き方の問題などを織り込みながら読ませる謎解き小説の本領を遺憾なく発揮する。

四一五頁に上る壮大な長編小説からは一気に読者をひきつける筆力が窺え、楽しみながら人間の生き方を問うシリアスな問題意識に貫かれている。ノーバディ・ザ・ブツダ：英語調のタイトルが示す直訳は、「見捨てられた仏陀」、その奥義は「無名の悟りを拓いた者」。沖繩の小説世界に新鮮な可能性を示唆した力作である。

(二〇〇三・五・二〇)

〈第8回〉池間キヨ子・伊良波盛男

第八回平良好児賞は、池間キヨ子さんと伊良波盛男氏のお二人に決定しました。平良好児賞選考会の伊志嶺亮会長が五月七日記者会見して発表したものです。授賞式並びに祝賀会は十九日よる

七時から平良市西里のクール会館で催されます。

平良好児賞は、「生涯を通じて短歌を中心に、文芸・ジャーナリスト・郷土史など幅広い分野に亘って精力的な活動をくりひろげた宮古文学の「種まく人」であった平良好児氏を顕彰するとともに、その精神を受け継ぐために、一九九七年五月二十日、氏の誕生日に合わせて顕彰、以来毎年一回同日に催し、本年八回目を迎えます。

対象は、「宮古出身者の作品、あるいは宮古に関わる文芸作品ですぐれた活動をした個人・団体」で、「小説、ルポルタージュ、評論、詩集、歌集、句集、戯曲など」となっています。

今回受賞決定をみた池間キヨ子さんは、平良・西里出身、一九三二(昭和7)年生です。四十年近く中学の国語教師として教鞭をとり、五十代に入ってから傍ら、句作に励んできています。俳句サークル「藍の会」や麻姑山俳句会に入って、「タイムス俳壇」の常連となり、さらに結社「鷹」、沖繩俳句研究会等に入会して句作をつづけています。本年二月、初の句集『花甘蔗』を沖繩俳句研究会シリーズ第七集として上梓、高い評価を受けています。

伊良波盛男氏は平良・池間島出身、一九四二（昭和十七）年生です。十代から詩作に励み、一九七七年、第十一回沖繩タイムス芸術選賞奨励賞、一九七九年、第二回山之口獭賞を受賞しています。本年二月、宮古史を題材にした小説『鬼虎伝説と与那国を守った男』、『池間民俗語彙の世界』宮古・池間島の神観念』を刊行、著書は二十点近くにのぼっています。過去の受賞はすべて詩作に対する評価であり、今回の平良好児賞はそれに加えて、一連の宮古を題材にした精力的な著述活動に対する評価です。お二人の受賞祝賀会への会員多数の参加をよびかける次第です。

『宮古郷土史研究会会報』一四二号、二〇〇四・五・一三

〔第9回〕伊良部喜代子 『歌集 海神祭』

著者は宮古を離れて三十数年、県外で学び、嫁いで、夫の勤めに従って、東京、千葉、長野、宮城、大阪、神奈川、そして再び宮城と、各地を転々とし、今年四月那覇に移り住む。それでいて何処の地にあつても、父祖の地、沖繩・宮古の出自を鮮烈に反映した歌を詠んでいる。収録された三七四首のうち一〇〇首近くは

故郷・宮古そのものといつても過言ではない。

「われに似る人ら行き交う不思議さに笑うほかなし故郷に立つ」
「地霊祖霊も起ちて歌え神女らの神祝ぎの歌御嶽にみつる」
「眉太く彫り深き顔のはらからが大様に生きる おおよ ここも日本」など。作品は一見無技巧のように見えるが、実際には己の納得いくぎりぎりまで言葉を選び抜き昇華させた世界であろう。

古来多くの文人墨客が宮古を往来しているが、これほど宮古にこだわり、しかも平易に詠んだ作品は他にないように思う。

著者にとつても出自の地、沖繩・宮古へのこだわりは、原点とも言える古い習俗、民俗を色濃く残しているからばかりではない。

「米軍基地と御嶽ひしめく沖繩をかきくもらせてスコール激し」
「仏桑花は血だるまの赤したたらせ六月の庭につぎつぎひらく」
「沖繩の初夏の空を彩れるデイゴの真紅戦闘機の黒」なども詠んでいる。

三四歳から始めた作歌歴は二十年、その第一歌集である。「宮古に育った宮古人の目で」「今後も短歌と向き合っていく」という（「あとがき」）。ひきつづき第二、第三歌集が期待されるところで

ある。(二〇〇五・五・二二)

〈第10回〉平良雅景・砂川光子

宮古出身者が宮古にかかわるすぐれた文芸活動をした人に贈られる第十回平良好児賞の受賞者が四月二十七日発表された。句集『はぐれ鷹』の那覇在住・平良雅景さん(八四歳・本名賀計)と、歌集『時間の川』の同じく那覇在住・砂川光子さん(六八歳)の二人。授賞式並びに祝賀会は故好児の誕生日に当たる五月二十日よる七時から西里の共和ホテル別館で催される。

平良さんは、一九二二(大正十一)年十二月十日平良の西里出身。県立宮古中学(八期)から四四年三月台北帝大医学専門部を出て軍医として従軍。戦後一時期は平良で開業していたが、のち慶応大学医学部神経科教室に入り、五九年那覇・天久に精神神経科天久台病院を開設、現在に至っている。平良で開業中、医院は文学青年らが常時出入りして文芸サロンの観であったようだ。そのころから俳句に親しみ、職員による俳句会は六九年十一月、開院十周年を記念して、句誌『花風』を創刊している。国仲穂水氏

の選による活動で、傍ら好児主宰『郷土文学』にも寄稿していた。

沖縄県俳句協会並びに沖縄県現代俳句協会会長でもある。

句集『はぐれ鷹』(三二三句収録)について、選考委員の伊志嶺亮氏は、「凧一点島一村の空揚げ、花福木島の時計は籠り打つ、流星の尾が消え島の闇戻る、などのほか、句集の題となった、風に乗るほかなし島のはぐれ鷹、など宮古吟と思われる句も数多い。実に伸びやかで優雅な句格を持つ初句集」であると評している。

砂川さんは、一九三七(昭和十二)年六月八日、城辺の長間出身。宮古高校から五八年三月、平安女学院短期大学英文科を卒業。長年教職にあつて、九四年琉球新報カルチャー短歌教室に通い、花ゆうな短歌会に所属して歌作に励んでいる。二〇〇〇年、日本歌人クラブ、二〇〇一年四月、結社「未来」に入会、さらに二〇〇二年九月、近藤芳美の選歌を受け、現在に至っている。

歌集『時間の川』(二九七首収録)について、選考委員の友利昭子さんは、「始めは繊細で深く、品性のある心象詠の数々に心地よく惹かれ、その後、ある種の軽い衝撃を受け、しんと静かな感動にとらわれる」と評している。歌集の題にもなっている「滔々と

われを流れる時間の川に溺れおぼれて母に近づく」等については、「大いなるものを信じ日々を生き抜く誠実で真摯な作者の姿がはつきりと見える」と述べている。同歌集は二〇〇五年度、沖縄タイムス芸術選賞・文学の部の奨励賞も受賞している。

今回は十二点の作品が候補に上がり、七点に絞りこまれたなかからさらに二点選んだものである。選考委員長の松原清吉氏は「選ばれた二作品は候補のなかでも傑出していた。平良さんの句集は鋭い感性で書かれ、砂川さんの大胆な歌には驚いた、ともに宮古の誇りだ」と評している。五月二十日、授賞式にひきつづいて開かれる祝賀会は、会費三〇〇〇円、多くの参加を呼びかけている。『はぐれ鷹』B六判、一八九頁、二〇〇五・一一・一五刊、本阿弥書店。『時間の川』B六判、二〇三頁、二六二五円、二〇〇五・六・八刊、ながらみ書房。

なお平良好児顕彰会は、第八回まで顕彰し、昨二〇〇五年第九回から、好児が初代編集局長をつとめた宮古毎日新聞社が創刊五十年を記念して引きついでいます。

『宮古郷土史研究会会報』一五四号、二〇〇六・五・一二

〈第11回〉豊島貞夫 『記憶の中の風景』

「人は誰でも原体験・原風景をもっている。その原点に戻る時、人は自分と出会い、自分を再確認する」、古い写真を「長い時間の経過と人生経験を重ねた目で見ると、過ぎ去った日々のできごとや、消えてしまった風景が新しい意味をもって立ち現れてくる。平々凡々と生きていたおじいさんやおばあさんたちが、実は性根を据えて悠揚として生きる人生の達人であったことに気付く」

（「まえがき」より）

本書はこの言葉の中にすべて言い尽くされているように思う。一九五四年以来教職一筋に生きてきた著者が、一九六〇（昭和三五）〜一九七五年までの十六年間に写しとった県民各層の様々な暮らし、各地の景観、催しもの等の写真一一〇点が収められている。まるでカメラを手に取った当初から、いつかこのように一冊にまとめようと構想していたかのような、プロの写真家の感を抱かせる写真集である。発表に当たって、当時の撮影現場や事柄の現況まで追跡しての解説は、それ自体独立したエッセイとして

も読ませてくれる。同時に、本書に相乗効果をもたらしている。或る種の文明批評をなしているとも言えよう。

多忙な教職にあつても、著者の写真歴は早くから知られている。宮古では故親泊宗正氏と一九八一年から九七（平成九）年までに六回「写真二人展」を催し、二〇〇三年には本書に先立って『白雪の記憶―復帰前・沖縄の教育』を刊行しておられる。今回の『記憶の中の風景』は、まさに満を持しての感があり、引き続きその後のご上様に期待を寄せるものである。（二〇〇七・六・八）

〈第14回〉森田たもつ『蓬萊の彼方』

『蓬萊の彼方』は表題の作品のほか、「オールド・マーチン」「メリークリスマス everybody」「ボタン」の三作品を収めている。このうち書き下ろしの「ボタン」を除く三点は県知事賞や両県紙の最高文学賞の受賞に輝いている。

宮古は面積にして全島の十分の一、人口わずかに数万だが、時として大陸を思わせ、平良のまちは大都市とみまがう景観がある。これらの作品の舞台は宮古のようであり、大都会の片隅を思わせ

るものがある。筆力のなせるわざであろう。

第二次世界大戦最後の激戦「沖縄戦」では、宮古は地上戦こそなかったものの、米英軍の連日の猛爆撃で形あるものの方を失った。敗戦で価値体系も崩壊したが、人びとはいつまでも茫然自失していたわけではない。焦土の中からその日の糧を求め、ひいては宮古の「自立」を求めてたくましく立ち上がったのだ。

米軍の全面占領下、その試行錯誤の一つが、「密貿易」であった。小型漁船で嚴重な警戒網をかくぐぐって、行政権の分離された日本本土はもとより、中国大陸、香港、マカオ、台湾などへ出かけ、衣食住はじめ、あらゆる生活必需品を買い求めた。今日の基礎はこのようにして築かれたのである。文芸活動も同様である。「蓬萊の彼方」は、このような当時の厳しい世相の中でつましく、時としてたくましく生きる人びとの姿を、利権をあさる政治家やヤクザなどまで登場させて筆力ゆたかに描いている。人間関係が複雑に入りこんでいてわかりにくい一面もないわけではないが、大衆小説のような面白さを併せもっている。次回作がたのしみである。

（二〇一〇・五・二二）

〔第17回〕 上地慶彦 『マツガニ川柳』

「平良好児賞」十七年の歴史で、「川柳」分野での授賞は初めて。辞典によると、川柳は江戸時代中期頃から盛んになったようである。俳句同様「五・七・五」の十七音ですが、季語などの制約はなく、多く口語で、人情、風俗、人生の弱点、世態の欠陥などをうがち、簡潔、滑稽、機知、諷刺、奇警などが特色のようです。

『マツガニ川柳』は、主に「宮古毎日新聞」に寄稿した川柳とエッセイを一巻に収めた句文集になっています。在職中に「サラリーマン川柳」に触発されて作り始め、一九九六（平成八）年県紙「川柳欄」に入選して以来二十年近く、那覇川柳の会に所属し、月刊誌『川柳マガジン』を愛読して、精進を重ねています。

国際的広がりから日常生活まで多彩です。巻頭を飾る「裏金も野菜も運ぶダンボール」は、『川柳マガジン』（二〇〇六年八月）特選一位を獲得した作品。少しも激することなく、さりげなく時の政界の裏工作を諷刺しています。

著者は、出身地東仲宗根・ニヤーツの方言を若い世代に伝えよ

うと『ニヤーツ方言^フ』（初版一九九三年）の増補改訂版も今年出しています。（二〇一三・六・二）

三、宮古の文学碑

1. 篠原鳳作句碑

「しんしんと肺碧きまで海の旅」

鳳作の本名は國堅。「無季俳句の旗手」として知られる。一九〇六（明治三九）年一月七日鹿児島市池之上町に生れる。一九二九（昭和四）年、第七高等学校造士館から東京帝国大学法学部を卒業。一九三一年三月、創立間もない県立宮古中学校に赴任、一九三四年十月、母校の鹿児島県立二中に転勤するまで、多感な中学生に公民と英語、時に美術を教える。このころ雲彦と号し、帰郷後鳳作に改める。句碑は宮古中学の教え子らによって、一九七二（昭和四七）年十一月二十日、平良・下里のカママ嶺公園に建立された。薩摩半島・長崎鼻の鳳作句碑に向き合っている。揮毫・三谷昭現代俳句協会長。一九三六（昭和十一）年九月十七日没。

2. 宮國泰誠歌碑

「見わたせば甘蔗のをばなの出そろいて

雲海の如く島をおほへり」

泰誠は一九一五(大正四)年十月二五日平良・西里に生まれる。

一九四三(昭和十八)年、県立宮古中学から台北帝国大学医学専門部を卒業、開業医として生涯へき地医療に従事する傍ら、短歌に精進した。歌碑は一九七〇年宮中歌会歌題「花」の入選作。作者の還暦を記念して福嶺紀仁、池村恵興、名嘉真春景、池村恵祐、伊波幸夫、平良重信ら多くの知友によつて、一九七五(昭和五十)年十月二六日、平良市熱帯植物園に建立された。揮毫・宮柊二。歌集「雲海」「摩文仁」「夕あかね雲」など多くの著作をなし、一九九二(平成四)年三月二三日没、七六歳。

3. 平良好児歌碑

「まかがよふ真砂まさごの浜は寂漠せきぼくと

時の器をみたしつつあり」

好児の本名は定英。戦前・戦後をとおして新聞記者、歌人として知られる。一九一一(明治四四)年五月二十日、平良・西里に

生れる。沖縄県師範学校在学中から詩作に精進、県紙文芸欄の常連となる。一九七三(昭和四八)年以來、季刊文芸誌『郷土文学』を主宰、文芸の「種まく人」に徹し、多くの歌集も著わす。歌碑

は、一九九一(平成三)年六月二二日、宮國泰誠、与座勇吉、伊志嶺亮、真栄城功らを中心に平良・下里のカママ嶺公園に建立された。揮毫・与那覇隆。一九九六(平成八)・四・一没、八四歳。

4. 大山春明句碑

「藍の香を稜かどのおこしけり機始はじま」

春明(一九一七〜八八)は東仲宗根出身、県立宮古中学校から中央氣象台附属氣象技術官養成所専修科をでて、生涯を氣象一筋に生きた。傍ら句作に精進、多くの作品を地元紙誌や県紙に発表した。没五周年を記念して、一九九三(平成五)年五月十六日、糸数金五郎、高嶺長二、伊志嶺亮、真栄城功ら多くの知友によつて遺稿『大山春明句文集』の刊行と併せて、句碑も建立された。

句碑は作品にふさわしく宮古神社境内に建つ、宮古上布の創始者と伝えられる「稲石」碑の傍らに立っている。揮毫・池間昌二宮古中学同期生（三期）。

5. 「かつお」句碑

「さおがまがるかつおが空で鳥になる」

この十年来、平良・池間の小、中学生の間では俳句熱が盛んである。伊良波盛男、市原千佳子（旧姓吉浜）という二人の山之口獭賞受賞詩人をだしている土地柄のせいもあるうか。「一茶まつり」で知られる山形県全国小・中学生俳句大会に毎年多くの入賞者をだしている。「句碑」は一九八九（昭和六四）年十一月の「一茶まつり」に入賞した池間中三年・親泊裕之君の作品。翌九〇（平成二）年一月二七日、同校校庭に建立された。子どもたちの伸び伸びとした自由な発想は、池間の前途を示すかのようなのである。揮毫・与座住安。『ひららの文化』平良市文化協会設立十周年記念誌』一九九四（平成六）・三・三二（

6. 飯島晴子句碑

「残り鷹鳴くを聞きあふ一会かな」

一九八七（昭和六十二）年十一月、第十四回平良市民総合文化祭に招かれ、記念講演と句会に参列した俳人・飯島晴子（一九二一〜二〇〇〇、京都生）の句碑建立除幕式が二〇〇二（平成十四）年十二月二十八日熱帯植物園で催された。表面の句は「残り鷹鳴くを聞きあふ一会かな」である。

句碑建立については、二〇〇一年八月、伊志嶺亮平良市長はじめ、俳句同好の有志らによって「篠原鳳作記念資料室設置」並びに「飯島晴子句碑建立」準備委員会が発足、翌二〇〇二年十月、正式に実行委員会を発足させて広く県内外に寄付をつのっていたもの。事務局は友利昭子、池田俊男、岡恵子さんらが担当、諸準備ととのい、十二月二十八日の除幕となったものである。除幕式当日は故飯島晴子の娘後藤素子さん（横浜在住）も出席、伊志嶺亮実行委員長あいさつ、親泊宗正平良市教育長、立津精一同文化協会長の祝辞につづいて、「母飯島晴子を語る」で、句碑建立への喜びを語った。このあと現場で交流会が催され、新城悦子さんら

が歌を披露した。

なお、碑文には宮古を詠んだほかの「聳ひて宮古上布の砧打つ」「藍滲む宮古上布の砧盤」「洗骨の泉にふるへ秋の蝶」「風葬の岩棚秋の日を剩す」の四句も刻まれている。揮毫は池田俊男。

『宮古郷土史研究会会報』一二四号、二〇〇三・一・一〇

7. 山田弘子句碑

「蒼海へ鷹を放ちし神の島」

句誌『円虹』を主宰する俳人・山田弘子さんの句碑が二月五日平良・下里・カママ嶺公園の市街地を見おろす小丘に建立されました。池間中、鏡原中、上野中などの児童生徒らの句碑を別にする、宮古では篠原鳳作、大山春明、飯島晴子につづく四つめの句碑です。

俳人山田さんは兵庫県出身。阪神・淡路大震災の年に『円虹』を立ち上げ、本年十年の節目を迎えます。宮古との関わりは、『円虹』の「虹の子俳句欄」に伸びやかな俳句を寄稿する子どもたちの住むミヤコとはどのような地なのか、との思いがつのつて一九

九九年四月、初めて来訪された由。以来毎年二度、三度と訪れ、句作の指導、講演、句会を開いてきています。さきの「沖繩サミット」のさいには、国際俳句交流会理事という立場もあつて、「日独こども俳句サミットin宮古島」にも尽力しています。

句碑表面には自筆の「蒼海へ鷹を放ちし神の島」が刻まれ、裏面には、略歴のほか「伝統俳句の骨法に無碍自在なる精神がダイナミックに息づく」と評される俳人 山田弘子 七年前宮古島に『俳句の種』を撒く 毎年通い 水を遣り 肥料を与え続けている 今真太陽（マティダ）の島は俳句の島になりつつある」と刻まれています。

除幕式には、兵庫県からも大勢の関係者が出席、奥浜善弘甘露寺住職の読経のあと、伊志嶺亮後援会長あいさつ、久貝勝盛平良市教育長祝辞のあと、山田さんが「句碑を宮古の地に建てていただいて感謝している。句碑は私の魂の一部。命ある限りこの島との縁を今後とも大切にしていきたい」とあいさつしました。記念植樹があつて、ひきつづき句碑を囲み祝賀の宴も催されました。なお午後からは、下地利幸氏らの案内で、島尻元島を皮切りに

島尻漁港から大神島を望み、ついで大和井、ウブカー、ぶばかり石、仲宗根豊見親の墓、漲水御嶽、石畳道など、「平良綾道」を歩いて、吟行会が催され、ひきつづきマリントーミナルで句会も開かれています。『宮古郷土史研究会会報』一四七号、二〇〇五・三・一〇

* 山田弘子、二〇一〇（平成二二）・二・七没、七六歳

8. 高沢義人『歌碑』建立五周年

上野・野原の「高沢義人歌碑」建立五周年を記念する「八・一五平和集会」が同歌碑の前で開催された。高沢さんは九十七歳のご高齢のため出席は見合わされたが、代わって宮古に関わる作品が寄せられ、席上朗詠、披露された。歌碑建立実行委員会の事務局長をつとめた下地国雄氏の司会で開会し、友利定雄氏が主催者を代表して、およそ次のように挨拶した。

「本来ならば実行委員会の正副委員長（伊志嶺亮・友利恵勇）をつとめたどちらかが挨拶すべきでしょうが、生憎二人とも旅行中のため、代って幹事の中で最年長の私が担当することになりました。高沢さんは三年後には百歳を迎えるご高齢のため出席出来

ませんが、宮古に関する作品が届いていますので、のちほど紹介させていただきます。

高沢さんは弁護士を志して中央大学法学部の夜間部に入り、社会科学研究会や唯物論研究会等のサークル活動をしていたのが、治安維持法違反だとして卒業式の翌朝警視庁に逮捕されました。三四五日間にわたって拘束され尋問されています。現在なら当たり前の学習活動が当時は理不尽にも逮捕の理由です。その後教職につきましたが、一九四三（昭和十八）年夏、補充兵として軍隊に召集され、翌四四年十月、満州から宮古に移駐してきました。米英軍によって輸送路を絶たれたため、宮古は食糧や医薬品が不足し、多くの兵士が飢えとマラリアで死んでいます。衛生兵であった高沢さんは毎日死んでいく戦友を火葬するのが主な任務だったようです。

戦争が終わって、一九四六年二月、復員後は中学校の教師をしたり、市会議員になったりしたが、病気で引退してから短歌を作るようになりました。ある日の新聞に宮古についてうたった高沢さんの作品を仲宗根さんがみつけ、それから文通が始まって「歌

碑」建立へと発展したわけです……。」（以下略）。

このあと参加者全員で、一九六〇年代、祖国復帰運動でよくうたわれた「沖繩を返せ」「原爆許すまじ」をうたい、ついで池間キヨ子さんが高沢さんから送られてきた、次の六首の短歌を朗詠披露した。

亡き戦友に捧ぐ 高沢義人

餓死兵焼き捨てし具体語れと招かれて宮古歴教協に馳す夏の生き残り兵

補充兵われも飢えつつ餓死兵の骸焼きし宮古^{しま}よ八月は地獄

餓死兵を夜毎井桁に重ね焼くわれに一粒の涙なかりき

わがためのキニーネ一錠秘匿して戦友死なしめ悔い抱き老ゆ

蒼く風ざし宮古の海に銃捨てし速き八月を原点として

宮古島に果つべかりしを卒寿越え憲法改竄許さじと炎ゆ

ついで日程にはなかったようだが、司会の指名で三浦美恵さんと仲宗根の二人が意見を發表した。三浦さんは宮古に移り住んで

六年になること、この日午前中は生協主催の「戦跡めぐり」に参加し、戦争中の宮古が如何に大変な状況であったかを学習した。と、もつともつと宮古について学習を深め、多くの人に戦争と平和について考えてもらえるように頑張りたいことなどを語っていた。

仲宗根は、高沢さんを知るきっかけから、歌碑建立に至る経緯についておよそ次のように紹介した。

「博物館に在職中でしたので、そろそろ二十年近く前になりましたが、新聞のコラムに高沢さんと著書『いのちきらめけ』とともに、先の大戦中、沖繩の宮古島にいて、「多くの兵が餓死した」との談話とともに、この碑の裏面にもあります「餓死兵を夜毎井桁に重ね焼くわれに一粒の涙なかりき」との短歌が紹介されています。出版元の電話番号もありましたので、早速『いのちきらめけ』を取り寄せました。

同書には「終焉の島く宮古島に飢えて」と題して八首のついでました。送金のさい振替え用紙のうらにちよつとした通信を記したところ、思いがけず高沢さんから便りが届いたので。歴教協

の定例会で紹介したところ、高沢さんをお招きして戦中の宮古の体験を直接聞こうという話に発展しました。一九九八年五月、高沢さんご夫妻が五十余年振りに宮古を訪れました。ご夫妻がお帰りになったあと、今度は「歌碑」を建立し、宮古で戦争があったことを記録に止どめ、反戦平和を誓い行動する記念碑にしようということになりました。実行委員会が結成され、二百余名のカンパを得て二〇〇五年八月十五日、高沢さんをお招きしての除幕式に至る経緯については、皆さんご承知のとおりです。

この高沢さんの「歌碑」に隣接する朝鮮「慰安婦」の祈念碑、それにカママ嶺公園の「日本国憲法九条の碑」の三つを結んで、宮古の戦跡と関連づけながら、反戦平和を考え、行動する礎になればと考えています。」

最後に、再び全員で「異国の丘」「里の秋」「がんばろう」などをうたい、解散した。

なお太平洋戦争最後の激戦となった「沖縄戦」(一九四五年三月～六月)では、多くの一般県民が犠牲となった。二〇一〇年六月現在、摩文仁の「平和の礎」に刻銘された戦没者は二四万九三一

人、このうち県内一四万九一九三人(宮古三四三七人)、県外七万七二六六人、外国一万七二七二人である。今や戦争を知らない世代が全国民の八割をこすという。再び戦争を起させないために、戦争の残酷さ、平和の尊さを如何に継承していくか、体験者の声を聞き取るのはもとより、戦跡はじめ、考え得る限りのあらゆる方法を講じていくことが求められている。(『宮古郷土史研究会会報』一八〇号、二〇一〇・九・三)

*高沢義人・二〇一一(平成二三)・一・二八没、九七歳

9. 平良雅景句碑

「風に乗るほかなし島のはぐれ鷹」

本日(二〇〇九・一一・二〇)は「平良雅景句碑」建立、おめでとうございます。

只今から本日の「句碑」建立に至る経緯を報告致します。先ほど句碑建立実行委員長(伊志嶺亮)あいさつにもありましたように、平良雅景先生の句碑建立の話題は、今から三年前にさかのぼります。

二〇〇六年五月、雅景先生がその五〇年に及ぶ俳句活動の結晶として出された、初めての句集『はぐれ鷹』が第一〇回平良好見賞を受賞されました。その祝いの席で、話題になった、

「風に乗るほかなし島のはぐれ鷹」

の作品に感銘を深くした有志の間から、期せずして、この作品の碑を宮古のしかるべき所に建立したいものだ、との話題が出ておりました。

あれから三年、先ほど来のあいさつにもありましたように、雅景先生は今年「米寿」を迎えられます。それにくわえて、先生が地域医療のために専念される天久台病院が開院五〇周年という記念すべき節目を迎えます。まさに「句碑」建立の記念すべき節目の年だ、と三年来の話題が再燃した次第です。本年七月から有志による準備会が三回にわたって開かれ、八月三日、句碑建立実行委員会を発足させました。

それからわずかに三カ月有余、実行委員会のおよびかけに応えて、三〇〇人近い方々から貴重な浄財が寄せられ、本日の「句碑」建立除幕式となりました。

なおくわしいことにつきましてはお配りした「しおり」にのっ

ておりますので、のちほどご覧になって下さい。以上で「句碑」建立に至る概要の報告と致します。(二〇〇九・一一・二〇)

*平良雅景、二〇一三(平成二五)・六・一一没 九〇歳

10・貞明皇后歌碑「つれづれの友となりても慰めよゆくことか
たき我に代りて」(島尻・国立療養所宮古南静園)、一九四二(昭和十七)・一一・一三

11・石原雅太郎頌歌碑(山内朝保作)「白川田のつきせぬ水に
咲きかおる名をしたたえむ諸人ともに」、揮毫・池村泉城、(東仲
宗根添・白川田水源地)、一九六七(昭和四二)・二・三

12・垣花良香歌碑「かすみ立つ島の高嶺にのろし上げ就職にた
つ船の子ら励ます」(仲筋・八重山遠見公園)、一九七八(昭和五

三)・一一・二〇

13. 垣花良香歌碑「むすびにし愛のかたみよ紅椿故郷にかおれ
八千代ふるまで」、(仲筋・八重山遠見公園)、一九八〇(昭和五五)・
一・一九

14. 垣花良香歌碑「黄金の夕日を浴びて父と子が小鯉一尾棒に
つりゆく」、(池間添・佐良浜漁港傍)、一九八〇(昭和五五)

15. 「新宮古建設の歌」碑(仲元銀太郎詞・豊見山恵永曲)、揮
毫・古堅宗和、(宮国・うえのドイツ文化村)、一九九四(平成六)・
三・二二

16. 「池間行進曲」碑(池間昌増・詞曲)、揮毫・古堅宗和、(池
間公園)、一九九六(平成八)・一〇・二〇

17. 仲元銀太郎歌碑「豊原は我が故郷ぞ美しく和み榮えて永遠
に幸あれ」、(野原・豊原公民館)、一九九六(平成八)

* 仲元銀太郎、一九九八(平成一〇)・一二・六没 八九歳

18. 谷川健一歌碑「みんなみの離りの島の真白砂にわがまじる
日は燃えよ花礁よ」、(新里・太陽が窓)、二〇〇三(平成一五)・
一二・六

* 谷川健一、二〇一三(平成二五)・八・二四没、九二歳

19. 湧川新一句碑「行幸啓待つ磯香の地年始湧く」「皇后歌碑
かしこみて園春を待つ」(島尻・国立療養所宮古南静園)、二〇〇
四(平成十六)・四・二三

20. 昭和天皇歌碑「わが船にとびあがりこし飛魚をさきはひと
しき海を航きつつ」、揮毫・垣花恵蔵、(西里・宮古神社境内)、二
〇一一(平成二三)・八・七

四、「戦後宮古の文芸誌展」

1. 戦後五十余年、思索と実践の軌跡

一九九五（平成七）年六月二十八日付「琉球新報」夕刊の社会面トップは、大きく横一段一行凸版見出しで「戦後沖繩初の文芸誌発見」と伝えている。さらにその下に、タテ六段抜き三行の、夕暗の迫る暮舎の片隅に一株植えし百合の花咲く、元日本兵が和歌集「南海」「歌友録」、戦争からの解放詠むーの見出しがついている。

太平洋戦争最後の激戦「沖繩戦」のあと、米軍によって捕虜にされた兵士らが、翌一九四六（昭和二十一）年六月、収容所で発行した手づくりの文芸誌である。記事は「焦土・死のイメージ」「激戦地・首里」「戦争からの解放感」などが詠まれていることを伝えるとともに、池宮正治琉大教授の「戦争が終わって間もないころの激しかった時期に文芸誌がつけられたのはすごいと思う。歌には実感がこめられている」「戦後の沖繩での最初の文芸誌だろう」との談話も紹介している。「米軍が紙、印刷機を提供、手書きされた和歌集」とも記されているので、謄写印刷であろう。

宮古で、平良好児の主宰する『文化創造』が発刊されたのは、それより三カ月も早く、同年三月五日である。B五判でいどのわ

ずかに八頁建てではあるが、紙に限らず食糧はじめあらゆる物資の不足していた当時、磨滅いちじるしいとはいえ活版刷りである。当時としては出色の出来ばえといえよう。

「次に来る出発点」と題する巻頭言は、「民衆の文化低迷！知識層の知識貧困、之等を培ふ為の目論見である。インテリのはんりよたり得るは勿論、民衆文化の巨火たるべく、好児空拳にして『文化創造』を世に贈る。（中略）僕は宮古における虚偽と混迷の世相の中に自分を静かに見つめる為に沈黙を求めて来た。それは丁度白紙の上にペンを握っての休息であった。それは次にくる出発点に立つ息づまるような感激の発作である。おゝペン先が震へる」と記している。さらに編集後記では、「私は空拳を以て立った。紙不足で経済苦の只中に……。江湖の士来りて語れかし地下に燃えたぎる埋火の同志！来りて与せよ！」と記し、最後は『文化創造』を皆の舞台として活用せられよ、と結んでいる。個人誌の体裁をとりつつも、心あるすべての読者に紙面は開放されていることを示すものであろう。

創刊号には、下地かほる、大木たかし、イケイ・雅、嵩原恵典、

上野陽一ら数人の名も見える。ほかに詩、短歌も掲載されていて、八面下段には「投稿歓迎す、字数制限なし」とさえよびかけている。その後とも毎号十人内外の執筆者がいて、「投稿歓迎」のよびかけも掲載されている。

敗戦この方、琉球弧の島々は、奄美・沖縄・宮古・八重山四群島ごとに行政分離されていたのが、一九五二（昭和二七）年四月一日、琉球政府の発足で、一応一元化された。その間、各群島は米軍の全面占領下、その許容範囲内とはいえ、それぞれに小なりとも三権を整備し、衣食住の確保につとめ、児童生徒の教育など、人として生きていくに必要な整備にあたっていた。群島ごとに「自立」を模索していたともいえよう。

この時期、人はパンのみに生きるにあらず―を裏書きするかのよう、宮古でも十三種の新聞、十種の雑誌が発行され、活字に飢えた人びとに提供されている。今回、県立図書館宮古分館で催される（戦後）「宮古の文芸誌展」では、この時期から、現在までの文芸関係の単行本ならびに雑誌が展示される。もとよりすべて宮古出身者の手になる著述である。雑誌二十四点をはじめ、句集

十六、歌集二十、詩集六十一、小説十、隨筆集二十四、歌謡九、計百六十四点にのぼっている。

これらの著作物をとおして、戦後五十余年、宮古の風土の生んだ先人の思索と実践の軌跡をたどることができよう。

2. 焼跡に「宮古俳句会」の標札

『文化創造』は旬刊と銘うたれてはいたが、八月二十五日第五号で停刊している。創刊わずか五カ月、順調にいけば十八号となるはずであったろう。「ねたみや経済的圧迫」（四号）、「種々の困難性」（五号）による発行の厳しさを記している。

平良好児が新聞記者のかたわら雑誌発行に奮闘しているころ、ひとりの若者が中国大陸から復員してきた。平本魯秋である。敗戦後の俘虜生活のなかで、隊友の数田雨条のすすめで句作を覚えてきた魯秋は、しばらく焼跡のブラック小屋で両親と無為の日々を過ごしていた。そのうち「誰か俳句に興味をもって話し合える人はいないものか」と、「宮古俳句会」と記した小さな木片を「西里大通りに面した掘立小屋の角に吊しておいた」という。イタム

ガ―の向い辺りである。一週間ほどへたとある日の夕暮れ、ひとりの男が「宮古俳句会」の木片をじつと見入っていた。魯秋と本村武史の戦後初の出会いである（『八重干瀬』四号）。

二人は毎夜の如く出会い、俳句を語り、文学談にふけた。遂に魯秋は雑誌発行に必要な紙を求めて沖繩本島に渡る。当時群島間の渡航は米軍政府の許可を必要とした。魯秋はカツオ節や小豚を運んで売りさばき、あるいは紙など必需品と交換した。こうして同年十二月一日、戦後二つめの雑誌『文芸旬刊』を創刊し、宮古文芸協会が設立された。同人は武史、魯秋、好児のほか、克山滋、平良健、国仲穂水、平良恵仁、本村隆俊ら十五人。文芸協会は『文芸旬刊』の同人ならびに誌友の希望者で構成し、創刊後に役員等を選任している。会長に山内朝二、顧問に下地敏之、亀川恵信、平良彦一、與儀達敏の四人を推戴した。編集発行代表は武史である。

『文芸旬刊』はB四判、裏表わずかに二頁の謄写刷りではあるが、本文は八ポイント以下の細字でぎっしり埋めつくされている。小紙面の割には短歌、俳句、詩、小説、評論と、多彩である。武

史執筆の「文芸人の使命」創刊の辞に代へて」は、戦争責任の追及、宮古郡民の排他性等にふれるとともに、「文化島建設の為文学なんて生活の口質ではないと嘲笑する原始リアリズムと原始マンモニズムに新文化の名に於いて闘争せん」と宣言、さらに編集後記では「宮古文化建設の為あらゆる論説の粹を集めて強力なるジャーナリズムの形成を願ふ」と記し、「風は順風、水平線に遙かに微笑む。友等いざ」と結んでいる。

『文芸旬刊』は翌一九四七年九月二十日発行、二十六号まで確認できる。その後は宮古民政府の肝入りで設立された宮古文化連盟に引きつがれ、翌一九四八年一月二十五日『宮古文化』創刊へと発展する。創刊号には、十月二十日から三回にわたって文化座談会が開かれ、十一月二十九日文化連盟の設立総会となったことを紹介している。委員長稲村賢敷、副委員長山内朝隆、幹事下地明増、下地三恵子、編集発行人本村武史である。編集部員としてほかに平良恵仁、新里博一の兩名が武史と並記されている。

このころ恵仁は宮古民政府職員であり、「総合文化誌」の必要性について副知事与儀達敏、社会教育課長山内朝隆に力説したと語

っている。二号以降は『文化』に改題され、一九四九年八月一日付、十号まで確認できる。編集人は六、七号恵仁、八号賢敷、九、十号奥平朝一と代っている。

このあと一九五〇年三月十五日付で、武史、恵仁、博一ら三人を編集発行人とするB五判、謄写刷り、四十頁の『文芸』が創刊されているが、二号以降は未確認である。

このほか純然たる文芸誌としては、一九五八年『あざみ』（吉村玄得・松原清吉、他）、一九六五年『群』（伊志嶺亮・友利恵勇、他）、一九七三年『郷土文学』（平良好児）、一九八二年『八重千瀬』（砂川玄徳・宮川耕次、他）など。さらに文学をふくむ総合誌として『週刊宮古』（宮国泰良）、『週刊先島』（平良重信）、『週刊春秋』（野平恒）、『沖縄民主文化』（謝名元慶福・那川路朔）、『宮古ジャーナル』（砂川昇）、『みやこ時評』（座喜味英二）等がでてくる。

3. 「副読本」編集の動きも

戦後五十余年、宮古出身者の文芸活動は切れ目なくつづいてい

る。文芸誌は途絶えることはあっても句会や歌会は開かれ、地元紙はつねに文芸作品に紙面をさいている。詩歌に限らず、小説、エッセイ等も同様である。『文化創造』『文芸旬刊』『文化』など、いずれも作品は文芸全般にわたっている。

こうした多彩な文芸活動のなかで最も異彩を放っているのは詩の領域である。衣食住にも事欠き、紙や印刷資材さえ入手困難な時期、早くも本村武史編『白南風』第一集（一九四七・七、謄写刷り）、克山滋『白い手袋』（一九四八・一〇）がでている。『白南風』には、藤川耕作、平良恵一郎、斉藤トミ、伴旅人、島正美、一木ひろ、雪陽栢、本村武史、克山滋、本村たかしら十人の作品、十六点をおさめている。

ヘビコンデリア

白い道は

うねうねと

紺碧の空に溶ける

本村武史

ボンとほうった

吸殻から

一すじの煙りがたっただけ

あゝ

風も

見はるかす

坂の上で言葉を忘れた

へ M O D E R N O K I N A W A へ

明るい午后だった

白い波止場で

ニグロは口笛をふき

ヂョウは雲のやうに笑った

あゝ

鮮かにルウジユを濡らして

海を噴めるマダムよ

あなたの瞳は

湖のやうに青い

詩集は、一九六〇年代以降、確認できるだけでも六十余点をかぞえる。宮古はまさに「詩王国の観」あり、である。伊良波盛男十七点、新城兵一の九点をはじめ、泉見亨、市原千佳子、岡本定勝、垣花恵子、川上正人、川満信一、東風平恵典、砂川哲雄、平野長伴、松原敏夫、水納あきら、泰川恵徹、与那覇幹夫らである、俳句では、宮古俳句会の『白百合』（一九四七・七）にはじまって、同第二集（一九五二）、真栄城功の主宰する藍の会の『藍』一〜三集（一九九〇〜九五）、麻姑山俳句会の年間合同句集（一九九八〜）がある。個人では、伊志嶺亮、伊集紀美子、おおしろ建、大山春明、友利敏子、真栄城功、与那城勉、湧川新一らが句集を出している。

短歌は、平良好児編集の合同歌集『ともしび』（一九七二）が七人の作品三二一首を収録している。個人では、好児八点、宮国泰

誠三点とつづき、池村泉城、石原昌秀、垣花良香、川上正人、新里スエ、新城森彦らが歌集を出している。

小説は、一九五〇年代半ばから一九六〇年代にかけて、本村武史、松下仁（吉村玄得）、原竜次（松原清吉）、砂川玄徳らが精力的に地元紙誌に連載している。単行本は大方一九八〇年代に入ってからで、新里金福、金井喜久子、岸本和子、久貝徳三、砂川玄徳、渡久山寛三、宮里尚安、吉村玄得、与並岳生らが出している。

エッセイ（随筆）は、亀川恵信・孝子の『随想録』（一九五三）が嚆矢で、本村武史編合同作品集『青潮』（一九六七）が出ている。個人では、川満信一の五点を筆頭に、石垣義夫、池村一男、池村恵興、池村実秀、伊志嶺亮、伊志嶺賢二、大山高春、岡村一男、小緑恵良、垣花実記、垣花鷹志、兼島清、亀川正東、川上哲也、川満和夫、金城英浩、幸地努、島尻勝太郎、下地啓義、下地朝憲、白川英男、砂川智子、砂川博一、平良恵盛、平良利子、友利克、友利敏子、花城朝勇、宮国泰誠、吉茂、与那覇和彦、与那覇春吉らが出している。このうち少くない人びとが公職を定年したのち、公私の足跡を世相とからめて自伝風にまとめている。

歌謡については、市町村など公的機関でまとめたものもあるが、個人では、垣花良香、金井喜久子、平良玄幸、平良彦一、富浜貞吉、友利明令、古堅宗雄、前泊徳正、松田秀次らが古謡・民謡集を出している。

今回の「宮古の文芸誌展」には、高校の国語教師らも目録作成に参加している。将来的には宮古出身者の宮古を題材にした作品をもとに、「副読本」編集までもっていきたいという。多くの方が展示会場に足を運ばれるよう願うとともに、中・高校生のための「副読本」の一日も早い実現を期待したい。

『宮古毎日新聞』一九九八・一一・二（四）